

01【黄巾の乱】十八史略

鉅鹿張角、以妖術教授。号太平道。符水療病。遣弟子遊四方、転相誑誘。十余年間徒衆数十万。置参十六方。大方万余、小方六七千、各立渠帥。一時俱起。皆著黄巾所在燔劫、旬月之間、天下響應。遣皇甫嵩等討黄巾。

鉅鹿(きよろく)の張角、妖術を以て教授す。太平道と号す。符水(ふすい)を以て病を療す。弟子を遣はして四方に遊ばしめ、転(うた)た相誑誘(きようゆう)す。十余年間に徒衆数十万あり、参十六方を置く。大方は万余、小方は六七千、各々(おのおの)渠帥(きよすい)を立つ。一時俱(とも)に起る。皆黄巾(こうきん)を著(つ)け、所在に燔劫(はんきよ)はんきよす。旬月の間、天下響應す。皇甫嵩(こうほすう)らを遣はして黄巾を討たしむ。

(以下、吉川英治『三国志』桃園の巻より引用 青空文庫版)

また、黄巾軍の徒党は、全軍の旗もすべて黄色を用い、その大旆(おほはた)には、

蒼天已死 そうてんすでにしす

黄夫当立 こうふまさになつべし

歳在甲子 としこうしにありて

天下大吉 てんかだいきち

という宣文を書き、党の樂謡部は、その宣文に、童歌風のやさしい作曲をつけて、党兵に唄わせ、部落や村々の地方から郡、県、市、都へと熱病のようにうたい流行(はや)らせた。

大賢良師張角！

大賢良師張角！

今は、三歳の兒童も、その名を知らぬはなく、

(——蒼天ステニ死ス。黄夫マサニ立ツベシ)

と唄った後では、張角の名を囃(はや)して、今にも、天上の樂園が地上に実現するような感を民衆に抱かせた。

けれど、黄巾党が跋扈(はつこ)すればするほど、樂土はおろか、一日の安穩(あんゑん)も土民の中にはなかった。

張角は自己の勢力に服従(ふつじゆん)してくる愚民どもへは、

(太平を樂しめ)と、逸樂(いつらく)を許し、

(わが世を謳歌(おうか)せよ)と、暗に掠奪(りやくだつ)を奨励した。

その代りに、逆(さか)らう者は、仮借(かりかき)なく罰し、人間を殺し、財宝(さいほう)を掠(かす)めとることが、党の日課(にっか)だった。

地頭(じとう)や地方の官吏も、防ぎようはなく、中央の洛陽の王城へ、急を告げることもひんびんであったが、現下、漢帝の宮中は、頽廢(たいはい)と内争で乱脈(らんみやく)をきわめていて、地方へ兵をやるどころではなかった。

天下一統の大業を完成して、後漢の代を興した光武帝から、今は二百余年を経、官府の内外にはまた、ようやく腐爛(ふらん)と崩壞(むつがい)の兆(ちよう)があらわれてきた。

十一代の帝、桓帝(かんてい)が逝(ゆ)いて、十二代の帝位についた靈帝は、まだ十二、三歳の幼少であるし、輔佐の重臣は、幼帝をあざむき合い、朝綱(ちようこう)を猥(みだ)りにし、佞智(ねいち)の者が勢いを得て、真実のある人材

は、みな野に追われてしまうという状態であった。

心ある者は、ひそかに、

(どうなり行く世か?)と、憂えているところへ、地方に蜂起した黄巾賊の口々から、

——蒼天已死　　そうてんすでにしす

の童歌が流行ってきて、後漢の末世を暗示する声は、洛陽の城下にまで、満ちていた。

(引用終わり)

## 02【月旦評】十八史略

嵩与沛国曹操、合軍破賊。操父嵩、為宦者曹騰養子。或云、夏侯氏子也。操少機警、有權数。任侠放蕩、不治行業。汝南許劭、与從兄靖有高名。共覈論鄉党人物。毎月輒更其題品。故汝南俗有月旦評。操往問劭曰、我何如人。劭不答。劫之。乃曰、子治世之能臣、乱世之姦雄。操喜而去。至是以討賊起。

嵩、沛国の曹操と軍を合せて賊を破る。操の父嵩、宦者曹騰の養子と為る。或いは云ふ、夏侯氏の子なりと。操、少くして機警、權数有り。任侠放蕩にして行業を治めず。汝南の許劭、從兄の靖と高名有り。共に郷党の人物を覈論す。毎月、輒ち其の題品を更む。故に汝南の俗に月旦の評有り。操、往きて劭に問ひて曰く「我は如何なる人ぞ」と。劭、答へず。之を劫す。乃ち曰く「子は治世の能臣、乱世の姦雄なり」と。操、喜びて去る。是に至りて賊を討つを以て起る。

(以下、吉川英治『三国志』桃園の巻より引用 青空文庫版)

曹操は一日、その許子将を訪れた。座中、弟子や客らしいのが大勢いた。曹操は名乗って、彼の忌憚ない「曹操評」を聞かしてもらおうと思ったが、子将は、冷たい眼で一眇したのみで、卑しんでろくに答えてくれない。

「ふん……」

曹操も、持前の皮肉がつい鼻先へ出て、こう揶揄した。

「——先生、池の魚は毎度鑑ておいでらしいが、まだ大海の巨鯨は、この部屋で鑑たことがありませんね」

すると、許子将は、学究らしい薄べったくて、黒ずんだ唇から、抜けた齒をあらわして、

「豎子、何をいう！ お前なんぞは、治世の能臣、乱世の姦雄だ」

と、初めて答えた。

聞くと、曹操は、

「乱世の姦雄だ。——結構だ」

彼は、満足して去った。

(引用終了)

(注) 許劭の曹操評は、正史では「治世之能臣、乱世之姦雄」(『三国志』魏書・武帝紀注)あるいは「清平之姦賊、乱世之英雄」(『後漢書』許劭伝)であった。

03 【張角の死】十八史略

皇甫嵩討張角。角死。嵩与其弟戰、破斬之。  
皇甫嵩、張角を討つ。角死す。嵩、其の弟と戦ひ、破りて之を斬る。

04 【献帝即位】十八史略

上崩。在位二十二年、改元者四、曰建寧・熹平・光和・中平、子辨立。何太后臨朝。后兄大將軍何進、録尚書事。袁紹勸進誅宦官。太后未肯。紹等画策、召四方猛將、引兵向京、以脅太后、遂召將軍董卓之兵。卓未至。進為宦官所殺。紹勒兵捕諸宦官、無少長皆殺之。凡二千余人。有無鬚而誤死者。卓至問乱由。辨年十四、語不可了。陳留王答無遺。卓欲廢立。紹不可。卓怒。紹出奔。卓遂廢辨。陳留王立。是為孝獻皇帝。

上(しよう)崩ず。在位二十二年、改元すること四、建寧・熹平・光和・中平と曰ふ。子の弁、立つ。何太后、朝に臨む。後の兄、大將軍・何進(かしん)、録尚書事となる。袁紹(えんしょう)、進に宦官を誅せよと勸む。太后、未だ肯(がえ)んぜず。紹ら画策し、四方の猛將を召して兵を引(ひきぬ)て京(けい)に向かひ、以て太后を脅かし、遂に將軍董卓(とうたく)の兵を召す。卓、未だ至らず。進、宦官の殺す所と為る。紹、兵を勒(ろく)して諸(もろもろ)の宦官を捕へ、少長と無く皆、之を殺す。凡そ二千余人なり。鬚(ひげ)無くして誤ちて死する者有り。卓、至り、乱の由(よし)を問ふ。弁、年十四、語、了すべからず。陳留王、答へて遺(のこ)す無し。卓、廢立せんと欲す。紹、可(き)かず。卓、怒る。紹、出奔す。卓、遂に弁を廢す。陳留王、立つ。是を孝獻皇帝と為す。

(注) 献帝(181〜234)。姓は劉、諱(いみな)は協、字(あざな)は伯和。後漢の最後の皇帝。禪讓して退位し、山陽公となった。魏による諡号(しごう)は孝獻皇帝、蜀漢による諡号は孝愍皇帝。古代日本の東漢氏(やまとのあやうじ)は献帝の子孫と称した。

05 【反董卓連合軍】十八史略

孝獻皇帝名協、九歳為董卓所立。関東州郡、起兵討卓、推袁紹為盟主。卓焼洛陽宮廟、遷都長安。

孝獻皇帝、名は協、九歳にして董卓の立つ所と為る。関東の州郡、兵を起して卓を討ち、袁紹(えんしょう)を推(お)して盟主と為す。卓、洛陽の宮廟(きゆうびよう)を焼き、都を長安に遷(うつ)す。

六、本初

頼山陽「詠三国人物十二絶句」

冀北万蹄塵蓋辺 群雄用武孰齐肩 不蹂千里青青草 熟視阿瞞先著鞭

冀北 万蹄 塵蓋 辺を蓋ふ

群雄 武を用ゆる 孰か肩を齊しうする

蹂まず 千里青青の草

熟視すれば 阿瞞 先づ鞭を著す

千里青青草〓董卓のアナグラム。

阿瞞〓曹操の小字。

著〓「著作」「著名」のときはチョと読むが、「著鞭」のときはチャクと読む。

【大意】

袁紹は最初、ヒーローだった。彼は反・董卓連合軍のリーダーとして、冀北の地から攻め寄せた。しかし、いざ開戦となると、董卓の強大な軍力がこわくなり、足踏みした。敵と見合っているうちに、袁紹よりずっと小物だった曹操が先鞭せんべんをつけ、自軍に進撃の号令をくだした。

【評】先鞭をつけるは、漢文の四字成語では「先我著鞭」ないし「先吾著鞭」。

#### 06 【孫堅】十八史略

長沙太守富春孫堅、起兵討卓。至南陽。衆数万、与袁術合兵。術与紹同祖。皆故太尉袁安之玄孫也。袁氏四世五公、富貴異於佗公族。紹壯健有威容、愛士。士輻湊。術亦俠氣。至是皆起。堅擊敗卓兵。術遺堅凶荊州。為劉表將黃祖歩兵所射死。

長沙の太守・富春の孫堅(そんけん)、兵を起して卓を討つ。南陽に至る。衆数万、袁術(えんじゅつ)と兵を合(が)つす。術は紹と同祖なり。皆、故(もと)の大尉・袁安の玄孫なり。袁氏、四世五公、富貴、佗(た)の公族に異なり。紹、壯健にして威容あり。士を愛す。士、輻湊(ふくそう)す。術も亦た俠氣あり。是(こゝ)に至りて皆起る。堅、撃ちて卓の兵を敗る。術、堅をして荊州を凶らしむ。劉表の将・黄祖(こうそ)の歩兵の射る所と為りて死す。

#### 07 【呂布と董卓】十八史略

司徒王允等、密謀誅卓。中郎將呂布、膂力過人。卓信愛之。嘗小失卓意。卓手戟擲布。布避得免。允結布為内応。卓入朝、伏勇士於北掖門刺之。卓墮車大呼呂布。布曰、有詔討賊臣。応声持矛、刺卓趣斬之。先是卓築塢于郿、積穀為參十年儲。金銀・綺錦・奇玩、積如丘山。自云、事成拋天下。不成守此以老。至是暴屍於市。卓素肥。吏為大炷、置臍中然之。光達曙者数日。卓党与兵犯闕、殺王允。呂布走。

司徒・王允(おういん)ら、密かに謀りて卓を誅す。中郎将・呂布(りよふ)、膂力(りよ)りよく(人)に過ぐ。卓、之を信愛す。嘗て少しく卓の意を失ふ。卓、手づから戟(ほこ)もて布に擲(なげう)つ。布、避けて免(まぬか)るを得たり。允、布に結びて内応を為さしむ。卓の入朝するとき、勇士を北掖門(ほくえきもん)に伏せて之を刺す。卓、車より墜ちて、大いに呂布を呼ぶ。布曰く「詔(みこと)のり有りて賊臣を討つ」と。声に応じて矛を持ち、卓を刺し趣(すみや)かに之を斬る。是より先、卓、塢(お)を郿(び)に築き、穀を積みて参十年の儲を為す。金銀・綺錦・奇玩、積むこと丘山の如し。自ら云ふ「事成らば天下に拋(よ)らん。成らざんば此(これ)を守りて以て老いん」と。是(こゝ)に至りて屍(し)を市に暴(さら)す。卓、素(もと)より肥えたり。吏、大炷(だいしゆ)を為(つく)りて臍中(せいちゆう)に置き、之を然(や)く。光、曙に達すること数日なり。卓の党、兵を挙げて闕(けつ)を犯し、王允を殺す。呂布走る。

#### 08 【劉備、関羽、張飛】十八史略

涿郡劉備、字玄德、其先出於景帝。中山靖王勝之後也。有大志。少語言、喜怒不形於色。

河東関羽、涿郡張飛、与備相善。備起。二人従之。

涿郡(たくぐん)の劉備、字は玄徳、其の先(せん)は景帝より出づ。中山靖王(ちゅうざんせいおう)の勝(のち)なり。大志有り。語言、少なく、喜怒、色に形(あら)はれず。河東の関羽、涿郡の張飛、備と相善(よ)し。備、起る。二人、之に従ふ。

頼山陽「詠三国人物十二絶句」

一、先主

長腕双垂閑不勝 結髻織履枉多能 幢幢一樹柔桑緑 展到蜀山青万層

長腕 双つながら垂れて 閑に勝へず

髻を結び履を織りて 枉しく多能なり

幢幢たる一樹 柔桑 緑なり

展へて蜀山の青きこと万層に到る

先主〓劉備のこと。両腕は膝まで届くほど長く、耳も人並みはずれて大きかった。

幢幢一樹：〓劉備の一族が住む邸の角に大きな桑の木が生えていて、皇帝の乗る屋根付 き馬車のような形に茂っていた。幼い劉備は「将来、きっとこんな馬車に乗れるような 人物になってやる」と宣言した、という。

「大意」

蜀漢の皇帝となった劉備は、若いころは不遇だった。人並みはずれた長い腕、という異相をもちながら、生活のためムシロやわらじを編んで暮らしていた。彼が子供のころ、邸に生えていた桑の木若葉にかけた夢は、後に見事に成功して、蜀漢の国土に青青と広がる山林にまでつながった。「評」子供のころの夢を捨てきれない人が、意外と大成するものだ。

「参考」正史『三国志』蜀書・先主伝：先主少孤、与母販履織席、為業。舍東南角籬上有桑樹、生高五丈余、遥望見、童子如小車盖。往来者皆怪此樹非凡、或谓当出貴人。先主少時、与宗中諸小兒於樹下戲、言「吾必当乘此羽葆盖車」。叔父子敬、謂曰「汝、勿妄語。滅吾門也」…「参考」篠崎小竹は、劉備が頼山陽に罵られなかったのは大いなる幸いだ、と評している。

川柳

「桃の木の下で文殊の知恵を出し」柳多留32篇

「桃園で関羽一人が飲んだよう」41篇

「翼徳も知らずに張飛酒が好き」91篇

(吉川英治『三国志』桃園の巻、より引用)

久しく見ない町の暮色にも、眼もくれないで彼は驢を家路へ向けた。道幅の狭い、そして短い宿場町はすぐとぎれて、道はふたたび悠長な田園へかかる。

ゆるい小川がある。水田がある。秋なのでもう村の人々は刈入れにかかっていた。そして所々に見える農家のほうへと、田の人影も水牛の影も戻って行く。

「ああ、わが家が見える」

劉備は、驢の上から手をかざした。春づく陽のなかに黒くぼつんと見える一つの屋根と、そして遠方から見ると、まるで大きな車蓋のように見える桑の木。劉備の生れた家なのである。

「どんなに自分をお待ちなされておることやら。……思えば、わしは孝養を励むつもりで、実は不孝ばかり重ねているようなもの。母上、済みません」

彼の心を知るか、驢も足を早めて、やがて懐かしい桑の大樹の下までたどりついた。

(中略)

「今まで、何千人、いや何万人となく、村を通る人々が、あの樹を見たらうが、誰もなんともいった者はいないかね」

「へ、に……」

「そうかなあ」

「珍しい樹だ、桑でこんな大木はないとは、誰もみないですが」

「じゃあ、わしが告げよう。あの樹は、靈木れいぼくじゃ。この家から必ず貴人が生れる。重々ちようちよう、車蓋のよなな枝が皆、そういつてわしへ囁いた。……遠くない、この春。桑の葉が青々とつく頃になると、いい友達が訪ねてくるよ。蛟龍こうりようが雲をえたように、それからこの主あるじはおそろしく身の上が変わってくる」

「お爺さんは、易者かね」

「わしは、魯の李定という者さ。というて年中飄々としておるから、故郷にいたためしはない。山羊をひっぱって、酒に酔うて、時々、市へ行くので、皆が羊仙といたりする」(中略)

「では、永く」

「変るまいぞ」

「変らじ」

と、兄弟の杯を交わし、そして、三人一体、協力して国家に報じ、下方民の塗炭(とたん)の苦(く)を救うをもって、大丈夫の生涯とせんと申し合った。

張飛は、すこし酔うてきたとみえて、声を大にし、杯を高く挙げて、

「ああ、こんな吉日はない。実に愉快だ。再び天にいう。われらここにあるの三名。同年同月同日に生まるるを希(ねが)わず、願わくば同年同月同日に死なんと、呶鳴った。そして、

「飲もう。大いに、きょうは飲もう——ではありませんか」

などと、劉備の杯へも、やたらに酒をついだ。そうかと思うと、自分の頭を、ひとりで叩きながら、「愉快だ。実に愉快だ」と、子供みたいにさげんだ。(引用終わり)

## 09 【孫堅と周瑜】 十八史略

孫堅之子策、与弟權留富春。遷于舒。堅死、策年十七。往見袁術。得其父余兵。策十余歳時、已交結知名。舒人周瑜、与策同年。亦英達夙成。至是從策起。策東渡江、轉鬪、所向無敵、当其鋒者。百姓聞孫郎至、皆失魂魄。所至一無所犯。民皆大悦。

孫堅の子・策、弟・權と富春に留まる。舒(じよ)に遷(うつ)る。堅死するとき、策、年十七。往(ゆ)きて袁術に見(まみ)ゆ。其の父の余兵を得たり。策十余歳の時、すでに交結して名を知らる。舒人(じよひと)周瑜(しゅうゆ)、策と同年なり。亦た英達(えいたつ)夙成(しゆくせい)なり。是(こゝ)に至りて策に従ひて起る。策、東のかた江を渡りて鬪し、向ふ所敢て其の鋒に当る者無し。百姓(ひやくせい)、孫郎の至るを聞き、皆、魂魄を失ふ。至る所、一も犯す所無し。民、皆、大いに悦ぶ。

10 【曹操、献帝を許都へ移す】十八史略

初曹操自討卓時、戰于滎陽、還屯河内。尋領東郡太守、治東武陽。已而入兗州、擲之。自領刺史。遣使上書、以為兗州牧。上還洛陽。操入朝、遷上於許。

初め曹操、卓を討つ時より、滎陽(けいよう)に戦ひ、還りて河内(かだい)に屯(とん)す。尋(ついで)東郡の太守を領し、東武陽を治む。已にして兗州(えんしゅう)に入りて之に擲(よ)る。自ら刺史(しし)を領す。使ひを遣はして上書し、以て兗州の牧と為る。上(しよ)う、洛陽に還る。操、入朝し、上を許に遷(うつ)す。

七、孟徳

頼山陽「詠三国人物十二絶句」

金刀版籍得雄蹲 銅雀楼台日月昏 七十二堆春草碧 更無寸土到児孫

金刀の版籍 雄蹲するを得て

銅雀楼台 日月昏し

七十二堆 春草碧く

更に寸土の児孫に到る無し

金刀「卯」金刀。漢王朝の国姓「劉」のアナグラム。

七十二堆「曹操は自分の墓を盗掘されぬよう」「七十二疑冢」を作らせた。

【大意】

魏の曹操は、劉氏の国土を乗っ取った。曹操は自分の権勢を天下に示すため、銅雀台を築かせた。天空の太陽や月が隠れて見えぬほど豪壮な高層建築だった。また曹操は自分の死後、墳墓が盗掘されぬよう、七十二もの偽の墓を作らせた。

それほど周到に悪知恵を働かせた曹操だったが、曹操の魏も、司馬氏に乘っ取られ、あえなく滅亡。結局、曹操は自分の子孫に寸土も残せなかった。残せたのは、彼の七十二箇所の墓に青青と生える春の雑草だけである。

「評」徳が薄ければ、結局、何も残せない。

11 【呂布の死】十八史略

操擊殺呂布。初布自関中出奔袁術。又歸袁紹。已而又去。為操所攻、走歸劉備。尋又襲備。抛下邳。備走歸操。操遣備屯沛。布使陳登見操、求為徐州牧。不得。登還謂布曰、登見曹公言、養將軍如養虎。当飽其肉。不飽則噬人。公曰、不然。譬如養鷹。飢則附人、飽則颺去。布復攻備。備走復歸操。操擊布、至下邳。布屢戰皆敗。困迫降。操縛之曰、縛虎不得不急。卒縊殺之。備從操還許。

操、撃ちて呂布を殺す。初め布、関中より袁術に出奔す。又、袁紹に歸す。已(す)でにして又去る。操の攻むる所と為りて、走りて劉備に歸す。尋(つ)いで又、備を襲ふ。下邳(かひ)に抛(よ)る。備、走りて操に歸す。操、備をして沛(はい)に屯せしむ。布、陳登(ちんとう)をして操に見(まみ)えしめ、徐州の牧と為らんことを求む。得ず。登、還りて布に謂ひて曰く「登、曹公に見えて言ふ『將軍を養ふは虎を養ふが如し。当に其の肉に飽かしむべし。飽かざれば則ち人を噬(か)まん』と。公曰く『然らず。譬(たと)へば鷹を養ふが如し。飢うれば則ち人に付き、飽けば則ち颺(あ)がり去る』と。布、復た備を攻む。備、走りて復た操に歸す。操、布を撃ちて下邳に至る。布、屢(しばしば)戦ひて皆、敗る。困迫して降る。操、之を縛して曰く「虎を縛するは急ならざるを得ず」と。卒(つひ)に之を縊殺(いさつ)す。備、操に従ひて許に還る。

12 【袁術の死】十八史略

袁術初抛南陽。已而抛寿春。以讖言代漢者当塗高、自云、名字応之。遂称帝。淫侈甚。既而資実空虚。不能自立。欲奔袁紹。操遣劉備邀之。術走還、欧血死。

袁術、初め南陽に抛(よ)る。已にして寿春に抛る。讖(しん)に「漢に代る者は塗(みち)に当りて高し」と言ふを以て、自ら「名字、之に応ず」と云ふ。遂に帝と称す。淫侈(いんし)甚だし。既にして資実空虚なり。自立する能はず。袁紹に奔(は)しらんと欲す。操、劉備をして之を邀(むか)へしむ。術、走り還り、血を欧(は)きて死す。

13 【孫策から孫権へ】十八史略

孫策既定江東、欲襲許。未発。故所殺呉郡守許貢之奴、因其出獵、伏而射之。創甚。呼弟權代領其衆曰、挙江東之衆、決機於兩陣之間、与天下争衡、卿不如我。任賢使能、各尽其心以保江東、我不如卿。卒。年二十六。

孫策、既に江東を定め、許を襲はんと欲す。未だ発せず。故(もと)、殺す所の呉郡の太守・許貢(きょこう)の奴(ど)、其の出でて獵するに因りて、伏して之を射る。創(きず)甚(はなは)だし。弟・權を呼びて、代はりて其の衆を領せしめて曰く「江東の衆を挙げて機を兩陣の間に決し天下と衡(こう)を争ふは、卿(けい)我に如かず。賢を任じ能を使ひ各々其の心を尽くさしめて以て江東を保つは、我、卿に如かず」と。卒す。年二十六なり。

14 【官渡の戦い】十八史略

袁紹抛冀州。簡精兵十万、騎一万、欲攻許。沮授諫曰、曹操奉天子以令天下。今挙兵南

向、於義則違。窃為公懼之。紹不聽。操与紹相拒於官渡。襲破紹輜重。紹軍大潰。紹憤歔血死。

袁紹、冀州(きしゅう)に拠る。精兵十万・騎一万を簡(えら)び、許を攻めんと欲す。沮授(そじゆ)、諫めて曰く「曹操、天子を奉じて以て天下に令す。今、兵を挙げて南に向かはば、義に於いて則ち違(たが)はん。窃(ひそ)かに公の為に之を懼る」と。紹、聴かず。操、紹と官渡に相拒(ふせ)ぐ。襲ひて紹の輜重(しちよう)を破る。紹の軍、大いに潰(つい)(ゆ)。慚憤(ざんぷん)して血を欧きて死す。

### 15 【ただ使君と操とのみ】十八史略

車騎將軍董承、称受密詔、与劉備誅曹操。操一日從容謂備曰、今天下英雄、唯使君与操耳。備方食。失匕筋。值雷震詭曰、聖人云、迅雷風烈必變。良有以也。

車騎將軍董承(とうしよう)、密詔を受くと称し、劉備と曹操を誅せんとす。操、一日、從容(しょうよう)として備に謂ひて曰く「今天下の英雄は、唯、使君(しくん)と操とのみ」と。備方(まさ)に食す。匕筋(ひちよ)を失す。雷震に値(あたり)りて詭(いつはり)て曰く「聖人云ふ、迅雷風烈には必ず變ず、と。良(まこと)に以(ゆる)る有るなり」と。

「いなびかりまでは玄徳箸を持ち」柳多留25篇

### 16 【劉備の離反】十八史略

備既被遣邀袁術。因之徐州。起兵討操。操擊之。備先奔冀州。領兵至汝南。自汝南奔荊州。歸劉表。

備、既に遣(つか)はされて袁術を邀(むか)ふ。因(よ)りて徐州に之(ゆ)き、兵を起して操を討つ。操、之を撃つ。備、先づ冀州(きしゅう)に奔(は)しる。兵を領して汝南に至る。汝南より荊州(けいしゅう)に奔り、劉表に歸す。

### 17 【髀肉の嘆】十八史略

嘗於表坐。起至厠。還慨然流涕。表怪問之。備曰、常時身不離鞍。髀肉皆消。今不復騎。髀裏肉生。日月如流、老将至、功業不建。是以悲耳。

嘗(かつ)て表(ひょう)の坐(ざ)に於(お)いて、起(た)ちて厠(か)に至(いた)る。還(かへ)りて慨然(がいぜん)として涕(なみだ)を流(なが)す。表(ひょう)、怪(あや)しみて之(これ)を問(と)ふ。備(び)、曰(いは)く「常時(じょうじ)、身(み)を離(は)れず。髀肉(ひにく)、皆(みな)、消(しょう)す。今(いま)、復た騎(こ)らず。髀肉(ひにく)、生(しょう)ず。日月(じつげつ)は流(なが)るるが如(ごと)く、老(お)いの將(まさ)に至(いた)らんとするに、功業(こうぎょう)、建(た)たず。是(こゝ)を以(も)て悲(かな)しむのみ」と。

### 18 【三顧の礼】十八史略

瑯琊諸葛亮、寓居襄陽隆中。每自比管仲・樂毅。備訪士於司馬徽。徽曰、識時務者在俊傑。此間自有伏龍・鳳雛。諸葛孔明・龐士元也。徐庶亦謂備曰、諸葛孔明臥龍也。備參往乃得見亮、問策。亮曰、操擁百萬之衆。挾天子令諸侯。此誠不可与爭鋒。孫權抱有江東、

国險而民附。可与為援、而不可圖。荊州用武之國、益州險塞、沃野千里。天府之土。若跨有荊・益、保其巖阻、天下有變、荊州之軍向宛・洛、益州之衆出秦川、孰不箠食壺漿、以迎將軍乎。備曰、善。与亮情好日密。曰、孤之有孔明、猶魚之有水也。

瑯琊(ろうや)の諸葛亮(しよかつりよう)、襄陽(じょうよう)の隆中に寓居す。毎(つね)に自ら管仲・樂毅に比す。備、士を司馬徽(しばき)に訪(と)ふ。徽曰く「時務を識る者は俊傑に在り。此の間、自ら伏龍(ふくりよう)・鳳雛(ほうすう)有り。諸葛孔明・龐士元(ほうしげん)なり」と。徐庶(じょしよ)も亦た備に謂ひて曰く「諸葛孔明は臥龍なり」と。備、參(み)たび往きて乃ち亮を見るを得、策を問ふ。亮曰く「操、百万の衆を擁し、天子を挟(さ)しはさみて諸侯に令す。此れ誠に与(とも)に鋒を争ふべからず。孫權、江東に拠有し、国、險にして民附く。与(とも)に援(えん)と為すべく、図る可からず。荊州は武を用うるの国、益州は險塞(けんそく)にして沃野千里、天府の土なり。もし荊・益を跨有(こゆう)して其の巖阻(がんそ)を保ち、天下に變有らば荊州の軍は宛(えん)・洛に向かひ益州の衆は秦川(しんせん)に出でなば、孰(たれ)か、箠食壺漿(たんしししょう)して以て將軍を迎へざらんや」と。備曰く「善し」と。亮と情好、日に密なり。曰く「孤の孔明有るは、猶ほ魚の水有るがごとし」と。

川柳

「今日もまた留守でござると諸葛亮」柳多留26篇

「孔明も三回目から帯をとぎ」柳多留拾遺4篇

## 二、孔明

頼山陽「詠三国人物十二絶句」

有魚・尾泣窮冬 涸轍無人憐 誰料南陽半溝水 養渠忽地化為龍

魚有(う)り 尾(び) 窮冬(きゆうとう)に泣(な)く  
涸轍(こてつ) 人(ひと)として 憐(あは)れお無(な)し  
誰(たれ)か料(はか)らん 南陽(なんよう) 半溝(はんこう)の水(みづ)  
渠(か)を養(やしな)ひて忽地(たちまち) 化(か)して龍(りゆう)と為(な)る

・尾』詩経』「魴魚・尾、王室如燬」。魚が病気になるると尾が赤くなる、という。

：魚が空気や餌を求めて、水面に口を突き出すこと。

〔大意〕

若いころの諸葛孔明は、道路の水たまりの中の魚だった。貧乏と寒さに苦しみ、誰からもかえりみてもらえなかった。南陽の狭い田舎は、小さなどぶのようだったが、そこで暮らしていた彼が龍のように飛躍して天下に名を轟かせると、一体だれが予測できたろう。

〔評〕「轍(てつ)の急(いそ)い」から成功した「臥龍」孔明は、江戸時代の浪人の希望の星だった。

〔参考〕篠崎小竹は、半溝の水では孔明はともかく頼山陽みたいな大物を浮かべるには足りず、定めし不安定だろう、と評している。

## 19 【龐統】十八史略

士元名統、龐徳公従子也。徳公素有重名。亮每至其家、独拜床下。

士元、名は統、龐徳公の従子なり。徳公、素(もと)より重名(じゅうめい)有り。亮、其

の家に至る毎に、独り床下に拝す。

20 【赤壁の戦い・一】十八史略

曹操撃劉表。表卒。子琮荊州降操。劉備奔江陵。操追之。備走夏口。操進軍江陵、遂東下。亮謂備曰、請求救於孫將軍。亮見權說之。權大悅。

曹操、劉表を撃つ。表卒す。子の琮(そう)、荊州を挙げて操に降る。劉備、江陵に奔(は)しる。操、之を追ふ。備、夏口に走る。操、軍を江陵に進め、遂に東に下る。亮、備に謂ひて曰く「請ふ、救ひを孫將軍に求めん」と。亮、權に見(まみ)えて之に説く。權、大いに悦ぶ。

(頼山陽「詠三国人物十二絶句」より)

四、張飛

蛇矛・住万蹄塵 恢復神州機已新 応愧：在江漢 自呼翼徳是燕人

蛇矛・り住む 万蹄の塵

神州を恢復する 機 已に新たなり

応に愧(まじ)つべし 江漢に在るを

自ら呼ぶ 翼徳 是れ燕人なり

・「さへぎる」は「さいぎる」の音転なので、旧カナを「さへぎる」と書くのは間違ひ。

・「よろめく

〔大意〕

長坂の戦いで、しんがりをつとめた張飛は、たった一人、馬上で蛇矛をふるい、万単位の曹操の騎馬軍団を足止めた。今こそ、曹操の手から天下を取り戻すチャンスだ。荊州のあたりをウロウロするのは、みっともない。彼はみづから名乗った。われは張飛、あざなは翼徳、燕の産なり、と。〔評〕しんがりが一番危険で困難な任務だが、張飛は見事になしとげ、名をあげた。

五、趙雲

七尺彭亨胆満身 誰知鎧縫舎郎君 刀辺一塊収龍肉 留統岷峨半段雲

七尺の彭亨 胆 身に満つ

誰か知らん 鎧縫 郎君を舍つるを

刀辺 一塊 龍肉を収め

留統す 岷峨 半段の雲

郎君・龍肉＝劉備の息子・阿斗(劉禪)を指す。

岷峨＝岷山と峨眉山。蜀漢の国土の山。

〔大意〕

七尺の堂々たる体軀をもつ趙雲は、全身これ胆、という剛胆な英雄だ。長坂の戦いするとき、まだ赤ん坊だった阿斗は、なんと、乱戦の戦場の中で行方不明になった。趙雲は刀がきらめく戦場から、劉備の血を引く小さな赤子を救い出した。その赤子は成長し、後に蜀漢の二代目の皇帝となり、風雲の志を引き継いだ。

「評」最後の「雲」は、「蜀犬、日に吠ゆ」と言われた蜀の雲と、趙雲の名にかけている。

「趙雲が膝であどなく伸びをする」柳多留43篇

「戦いのひまに趙雲子守り唄」145篇

## 21 【赤壁の戦い・二】十八史略

操遣権書曰、今治水軍八十万衆、与將軍会獵於吳。権以示群下。莫不失色。張昭請迎之。魯肅以為不可、勸権召周瑜。瑜至。曰、請得数万精兵、進往夏口、保為將軍破之。権拔刀斫前奏案曰、諸將吏敢言迎操者、与此案同。遂以瑜督参万人、与備并力逆操、進遇於赤壁。操、権に書を遣(おく)りて曰く「今、水軍八十万衆を治め、將軍と吳に会獵せん」と。権、以て群下に示す。色を失はざるもの莫(な)し。張昭、之を迎へんと請ふ。魯肅、以て不可と為し、権に勸めて周瑜を召さしむ。瑜至る。曰く「請ふ、数万の精兵を得て、進みて夏口に往き、保(ほ)して將軍の為に之を破らん」と。権、刀を抜きて前の奏案を斫(き)りて曰く「諸將吏、敢て操を迎へんと言ふ者は、此の案と同じからん」と。遂に瑜を以て参万人を督せしめ、備と力を併せて操を逆(むか)へ、進みて赤壁に遇ふ。

(吉川英治『三国志』赤壁の巻より引用)

「予や、この一剣をもつて、若年、黄中の賊をやぶり、呂布をころし、袁術を亡ぼし、さらに袁紹を平げて、深く朔北(さくほく)に軍馬をすすめ、ひるがえて遼東を定む。いま天下に縦横し、ここ江南に臨んで強大の呉を一拳に粉碎せんとし、感慨尽きないものがある。ああ大丈夫の志、満腔(まんこう)、歓喜の涙に濡る。こよいこの絶景に対して回顧の情、望呉(ぼうご)の感、抑えがたいものがある。いま予自ら一詩を賦さん。汝らみな、これに和せよ」

彼は、即興の賦を、吟じ出した。諸将もそれに和して歌った。

その詩のうちに、

月は明らかに星稀(まれ)なり

烏鵲(うじゃく)南へ飛ぶ

樹(じゅ)を遠(めぐ)ること三匝(そう)

枝の依る(よ)べきなし

という詞があった。

歌い終わった後、揚州の刺史劉馥(りゅうふく)が、その詩句を不吉だといった。曹操は興をさまされて赫怒(かくど)し、立ちどころに剣を抜いて劉馥を手討ちにしてしまった。酔いがさめてからそれと知った彼はいたく沈痛な顔をしたが、その後悔も及ばず、子の劉熙(りゅうき)に死骸を与えて厚く故郷へ葬らせた。(引用終わり)

## 22 【赤壁の戦い・三】十八史略

瑜部将黄蓋曰、操軍方連船艦、首尾相接、可燒而走也。乃取蒙衝・鬪艦十艘、載燥荻枯柴、灌油其中、裹帷幔、上建旌旗、予備走舸、繫於其尾。先以書遣操、詐欲降。時東南風

急。蓋以十艘最著前、中江挙帆、余船以次俱進。操軍皆指言、蓋降。去二里余、同時発火。火烈風猛、船往如箭。烧尽北船、烟焰漲天。人馬溺焼、死者甚衆。瑜等率輕銳、靄鼓大進。北軍大壞、操走還。後屢加兵於權、不得志。操歎息曰、生子当如孫仲謀。向者劉景昇兒子、豚犬耳。

瑜の部将・黄蓋、曰く「操軍、方(まさ)に船艦を連ね、首尾相接す。烧きて走らすべし」と。乃ち蒙衝(もうしよう)闔艦十艘を取り、燥荻枯柴(そうてきこさい)を載せ、油を其の中に灌(そそ)ぎ、帷幔(いまん)に裏(つつ)み、上に旌旗(せいぎ)を建て、予め走舸(そうか)を備へ、其の尾に繋ぐ。先づ書を以て操に遣り、詐(いつはり)りて降らんと欲すと為す。時に東南の風、急なり。蓋、十艘を以て最も前に著(つ)け、中江に帆を挙げ、余船、次(じ)を以て俱(とも)に進む。操の軍、皆、指さして言ふ「蓋、降る」と。去ること二里余、同時に火を發す。火、烈しく、風、猛く、船の往くこと箭(や)の如し。北船を烧き尽くし、烟焰(えんえん)天に漲る。人馬、溺焼し、死する者、甚だ衆(おほ)し。瑜ら、輕銳(けいえい)を率ゐて靄鼓(らいこ)して大いに進む。北軍、大いに壞(やぶ)る。操、走り還る。後、屢と兵を權に加ふれども、志を得ず。操、嘆息して曰く「子を生まば当(まさ)に孫仲謀(そんちゆうぼう)の如くなるべし。向者(さき)の劉景昇の兒子は豚犬のみ」と。

「暖かな風に曹操氣が付かず」柳多留39篇

(頼山陽「詠三国人物十二絶句」より)

#### 十、仲謀

生子当如孫仲謀 不関天塹護金甌 可憐却被曹瞞餌 力竭荆襄斗大州

子を生まば当に孫仲謀の如くなるべし

関せず 天塹の金甌を護るを

憐れむべし 却つて曹瞞に餌ばせられ

力竭く 荆襄 斗大の州に

天塹……孫權の呉が「長江天塹」のおかげで「金甌無欠」であったことを指す。

斗大斗くらいの大きさを、ちっぽけなさま

〔大意〕

孫權は、残念な英雄だった。赤壁の戦いで曹操に勝ったときは、曹操から「もし子供をもうけるなら、孫權のような立派な人物がいい」と言われたほど評価された。呉は、長江という天然の要害に守られていたが、若い孫權の政治的才能も立派だった。

後に曹操は、荊州の地を餌に孫權を釣り、呉が劉備の蜀と争うようにしむけた。孫權は、まんと曹操の策にひかかった。彼の覇業の勢いは、ちっぽけな荊州で尽きてしまったのだ。惜しいかぎりだ。

〔評〕若いとき優秀でも、中高年でだめになる人が多いのは、権力者に限らない。

〔参考〕頼山陽は文政五年にも「孫權」を七絶に詠んでいる。

天塹自堪誇北人。菰蘆叢裡足君臣。萑萁不肯輸羊酪、領得江東千里春。

#### 十一、周瑜

東風焼尽北軍船 烟滅長江不見痕 怪得頻頻曲辺顧 還無一顧向中原

東風 焼き尽す 北軍の船

烟けむり 減して 長江 痕を見ず

怪しみ得たり 頻頻 曲辺に顧みるに

還また一顧として中原に向かふ無きを

曲辺顧二「周郎顧曲」の故事。

〔大意〕

赤壁の戦いで、東風が吹いた。周瑜が司令官をつとめる呉軍は、火攻めにより、曹操軍の船団を焼き払った。煙が消えたあと、長江の水面には、曹操軍はあとかたもなかった。曹操の本拠地である中原に攻め込む、絶好のチャンスだ。

しかし周瑜は、中原侵攻作戦を一顧だにしなかった。音楽の才能に恵まれ、酔っ払っていても楽隊の些細なミスを聞くとすぐに振り返ったという周瑜が、中原を振り返らなかった理由は、わか  
らない。

〔評〕頼山陽は詩人だから勇猛果敢を好むのだろうが、現実はそうはいくまい。

(引用終わり)

「前赤壁賦」蘇軾(蘇東坡。1037～1101)

：月明星稀烏鵲南飛此非曹孟徳之詩乎西望夏口東望武昌山川相繆鬱乎蒼蒼此非孟徳之困於周郎者乎方其破荊州下江陵順流而東也舳艫千里旌旗蔽空酒臨江橫槊賦詩固一世之雄也而今安在哉：

(前略)「月明らかに星稀(まれ)に、烏鵲(うじゃく)南に飛ぶとは、此れ曹孟徳の詩に非(あら)ずや。西のかた夏口を望み、東のかた武昌を望めば、山川(さんせん)相繆(あいまと)ひ、鬱乎(うっこ)として蒼蒼(そうそう)たり。此れ孟徳の周郎に困(くる)しめられし者(ところ)に非ずや。其の荊州を破り、江陵を下り、流れに順(したが)つて東するに方(あた)りてや、舳艫(じくろ)千里、旌旗(せいぎ)空を蔽(おお)ふ。酒を(した)みて江(こう)に臨(のぞ)み、槊(ほこ)を横たへて詩を賦す。固(まこと)に一世の雄(ゆう)なり。而(しか)るに今安(いづく)に在りや。(下略)



「使居中国、能乱人、不能為治。若乘边守險、足為一方之主」。(引用終わり)

## 26 【関羽の死】十八史略

漢中將関羽、自江陵出、攻樊城取襄陽。自許以南、往往遥応羽。威震華夏。曹操至議徒許都以避其鋒。司馬懿曰、備権外親内疎。関羽得志、権必不願也。可遣人勸権躡其後。許割江南以封権。操從之。時魯肅已死、呂蒙代之。亦勸権亦凶羽。操師救樊。権將陸遜、又襲羽後。羽狼狽走還。権軍獲羽斬之。遂定荊州。

漢中の將関・羽、江陵より出でて、樊城(はんじょう)を攻めて襄陽(じょうよう)を取る。許(きよ)より以南、往々遥かに羽に応ず。威、華夏に震(ふる)ふ。曹操、許の都を徙(うつ)して以て其の鋒を避けん(え)と議するに至る。司馬懿(しばい)曰く「備と権とは外、親にして、内、疎なり。関羽、志を得(え)ば、権、必ず願はざるなり。人をして権に勸めて其の後ろを躡(ふ)ましむべし。江南を割きて以て権を封ぜんことを許せ」と。操、之に従ふ。時に魯肅、已に死し、呂蒙、之に代わる。亦た権に勸めて羽を凶(はか)らしむ。操の師、樊を救う。権の將・陸遜、又、羽が後ろを襲ふ。羽、狼狽して走り還る。権の軍、羽を獲(え)て之を斬る。遂に荊州を定む。

「我がひげをふんまえ関羽度々のめり」柳多留122篇

(頼山陽「詠三国人物十二絶句」より)

## 三、関羽

北伐長駆不備呉 髯公終被阿蒙愚 問君曾読春秋日 却記秦人役無

北伐 長駆して呉に備へず

髯公 終に阿蒙の愚を被る

君に問ふ 曾て春秋を読むの日

却た秦人の 役を記するや無や

・役々秦軍が・山で晋軍に大敗した戦い。『春秋左氏伝』(僖公三十三年、前627)

【大意】

立派で美しい髯でも有名な関羽は、遠征して魏と戦っているあいだ、油断して呉軍への備えをしなかった。その隙をつかれ、「呉下の阿蒙」と呉の呂蒙に負けた。関羽よ。あなたも歴史書『春秋』を勉強したはずだ。あなたは、秦軍が敗北を喫した・山の戦いの教訓を、忘れていたのか。

【評】頼山陽の関羽への評価は、辛口である。

【参考】篠崎小竹は、漢人は関羽のたたりを怖がるので絶対にこんな詩は口にできまい、と評している。

## 27 【後漢の滅亡】十八史略

初曹操自兗州牧、入為丞相。領冀州牧。封魏公。作銅雀臺於鄴。已而進爵為王。用天子車服。出入警蹕。以子丕為王太子。操卒。丕立。自為丞相・冀州牧。魏群臣言、魏当代漢。丕遂迫帝禪位、以帝為山陽公。帝在位改元者參、曰初平・興平・建安。元年至二十五年、

則皆曹操為政時也。共參十一年。禪位又十四年而卒。漢自高祖元年為王、五年為帝、至是二十四世、四百二十六年。

初め曹操、兗州(えんしゅう)の牧より、入りて丞相と為る。冀州(きしゅう)の牧を領す。魏公に封ぜらる。銅雀台を鄴(ぎょう)に作る。已にして爵を進めて王と為り、天子の車服を用ひ、出入(しゅつにゅう)に警蹕(けいひつ)す。子・丕(ひ)を以て王太子と為す。操、卒す。丕、立つ。自ら丞相・冀州の牧と為る。魏の群臣、魏は当(まさ)に漢に代るべしと言ふ。丕、遂に帝に迫り位を禪(ゆず)らしめ、帝を以て山陽公と為す。帝、位に在り改元すること参、初平・興平・建安と曰ふ。元年より二十五年に至るまでは、則ち皆、曹操の政を為しし時なり。共に参十一年なり。位を禪つて又十四年にして卒す。漢、高祖元年に王と為り、五年に帝と為りしより、是(ここ)に至りて二十四世、四百二十六年なり。

## 28 【劉備、蜀で即位】十八史略

昭烈皇帝諱備、字玄德、漢景帝子中山靖王勝之後。有大志。少言語、喜怒不形。身長七尺五寸。垂手下膝、顧自見其耳。蜀中传言、曹丕篡立、帝已遇害。於是漢中王、發喪制服、諡曰孝愍皇帝。夏四月、即帝位於武擔之南、大赦、改元章武。以諸葛亮為丞相、許靖為司徒。立宗廟、禘祭高皇帝以下。立夫人吳氏為皇后、子禪為皇太子。

昭烈皇帝、諱(いみな)は備、字(あざな)は玄德。漢の景帝の子の中山靖王勝の後(のち)なり。大志有り。言語少なく、喜怒形(あら)はさず。身の長(たけ)七尺五寸。手を垂るれば膝より下り、顧みれば自ら其の耳を見る。蜀中伝へて言ふ「曹丕篡立(さんりつ)して帝已に害に遇へり」と。是(ここ)に於て漢中王、喪を發し服を制し、諡(おくりな)して孝愍皇帝(こうびんこうてい)と曰ふ。夏四月、帝位に武担の南に於て即き、大赦して章武と改元す。諸葛亮を以て丞相と為し、許靖(きよせい)を司徒と為す。宗廟を立て、高皇帝以下を禘祭(こうさい)す。夫人の吳氏を立てて皇后と為し、子の禪を皇太子と為す。

## 29 【魏王朝、成立】十八史略

魏主丕、姓曹氏、沛国譙人也。父操為魏王、丕嗣位。首立九品官人之法。州郡皆置九品中正、區別人物、第其高下。丕既篡漢、自立為帝、追尊操為太祖武皇帝、改元黃初。

魏主丕、姓は曹氏、沛国(はいこく)譙(しょう)の人なり。父の操、魏王と為り、丕、位を嗣(つぐ)ぐ。首(はじめ)め九品もて人を官するの法を立つ。州郡、皆、九品の中正を置き、人物を區別して、其の高下を第(ついで)でしむ。丕、既に漢を篡(うば)ひ、自ら立ちて帝と為り、操を追尊して太祖武皇帝と為し、黃初(こうしよ)と改元す。

## 30 【魏と吳の講和】十八史略

帝恥閑羽之没、自將伐孫權。權求和不許。權遣使於魏。魏封權為吳王。魏主問吳使趙咨曰、吳王頗知學乎。咨曰、吳王任賢使能、志存經略。雖有余閑博覽書史、不效書生尋章摘句。魏主曰、吳難魏乎。咨曰、帶甲百万、江・漢為池。南難之有。曰、吳如大夫者幾人。咨曰、聰明特達者、八九十人。如臣之比、車載斗量不可勝數。

帝、関羽の没せしを恥ぢ、自ら将として孫権を伐つ。権、和を求むれども許さず。権、使ひを魏に遣はす。魏、権を封じて呉王と為す。魏主、呉の使ひの趙咨(ちようし)に問ひて曰く「呉王、頗る学を知れるか」と。咨、曰く「呉王は賢を任じ能を使ひ、志、経略に存す。余閑有れば博く書史を覽ると雖も、書生の章を尋ね句を摘むに效(なら)はず」と。魏主、曰く「呉は魏を難(はばか)るか」と。咨、曰く「帯甲百万、江・漢を池と為す。何の難ることか之れ有らん」と。曰く「呉に大夫の如き者幾人かある」と。咨、曰く「聡明特達の者、八九十人あり。臣の如きは車に載せ斗もて量(はか)るとも勝(あ)げて数ふべからず」と。

### 3 1 【夷陵の戦い】十八史略

帝自巫峽至夷陵、立数十屯、与呉軍相拒累月。呉将陸遜、連破其四十余营。帝夜遁。魏主責呉侍子。不至。怒伐之。呉王改元黄武、臨江拒守。

帝、巫峽(ふきよう)より夷陵(いりよう)に数十屯を立て、呉軍と相拒(ふせ)ぐこと累月(るいげつ)なり。呉将・陸遜、其の四十余营を連破す。帝、夜に遁(のが)る。魏主、呉の侍子(じし)を責む。至らず。怒りて之を伐つ。呉王、黄武と改元し、江に臨みて拒(ふせ)ぎ守る。

### 3 2 【劉備の死】十八史略

参年、夏四月、帝崩。在位参年。改元者一、曰章武。諡曰昭烈皇帝。太子禅即位。封亮為武郷侯。太子既立。是為後皇帝。

参年夏四月、帝崩ず。在位参年。元を改むること一、章武と曰ふ。諡(おくりな)して昭烈皇帝と曰ふ。太子・禅、即位す。亮を封じて武郷侯と為す。太子、既に立つ。是を後皇帝と為す。

### 3 3 【劉禅、即位】十八史略

後皇帝名禅、字公嗣、昭烈皇帝子也。年十七即位。改元建興。丞相諸葛亮受遺詔輔政。

後皇帝、名は禅、字は公嗣(こうし)、昭烈皇帝の子なり。年十七にして即位す。建興と改元す。丞相・諸葛亮、遺詔を受けて政を輔(たす)く。

34 【君、みずから取るべし】十八史略

昭烈臨終謂亮曰、君才十倍曹丕。必能安國家、終定大事。嗣子可輔輔之。如其不可、君可自取。亮涕泣曰、臣敢不竭股肱之力、效忠貞之節、繼之以死。

昭烈、終りに臨んで亮に謂ひて曰く「君の才は曹丕に十倍す。必ず能く國家を安んじ、終(つひ)に大事を定めん。嗣子、輔くべくんば之を輔けよ。如(も)し其れ不可ならば、君、自ら取る可し」と。亮、涕泣(ていきゅう)して曰く「臣、敢て、股肱(ここう)の力を竭(つく)くして忠貞の節を效(いた)し、之に繼ぐに死を以てせざらんや」と。

参考・正史『三国志』蜀書・先主伝の注に載せる、劉備の息子への遺言

○「悪の小なるを以て之を為すこと勿れ。善の小なるを以て為さざる勿れ。惟れ賢に惟れ徳に、能く人を服す」。(アクのシヨウなるをモツてコレをナすことナカレ。ゼンのシヨウなるをモツてナさざるナカレ。コレケンにコレトクに、ヨクヒトをフクス)

『諸葛亮集』載先主遺詔勅後主曰「朕初疾但下痢耳、後軫雜他病、殆不自濟。人五十不称天、年已六十有余、何所復恨、不復自傷、但以卿兄弟為念。射君到、丞相嘆卿智量、甚大增修、過於所望、審能如此、吾復何憂。勉之、勉之。勿以惡小而為之、勿以善小而不為。惟賢惟徳、能服於人。汝父徳薄、勿效之。可読『漢書』『礼記』、閑暇歴觀諸子及『六韜』『商君書』、益人意智。聞丞相為写『申』『韓』『管子』『六韜』一通已畢、未送、道亡、可自更求聞達」。臨終時、呼魯王与語「吾亡之後、汝兄弟父事丞相、令卿与丞相共事而已」。

参考・正史『三国志』陳寿の評

○「高祖(劉邦)の風、英雄の器」「君臣の至公、古今の盛軌」

評曰、先主之弘毅寛厚、知人待士、蓋有高祖之風、英雄之器焉。及其挙国託孤於諸葛亮、而心神無貳、誠君臣之至公、古今之盛軌也。機権幹略、不逮魏武、是以基宇亦狭。然折而不撓、終不為下者、抑揆彼之量必不容己、非唯競利、且以避害云爾。

【ポイント】功よりも徳。利よりも志。天命と器。

★劉備「偽君子」説について

(渡辺一夫『異国残照』「偽善の勧め」より引用)

誰にでもあたりのよい人のことを、八方美人と呼びますが、(中略)僅か八方だけの美人では、偽善者としては下の下です。億兆の人々を、うまく騙し切れるほどの完璧な偽善者になることこそ、私の理想とするところであり、皆様にも、ぜひそうなってほしいとお願いいたします。(引用終わり)

★劉備の晩年と死後の評価↑↓曹操、孫権、豊臣秀吉の場合

(遠藤周作『狐狸庵 歴史の夜話』「狂った秀吉」より引用)

秀吉のことを考えるたび、私は若かった頃、ある飲屋で仏文学者の渡辺一夫先生が教えてくださった言葉を思いだす。

「遠藤君、人間の一生で一番、生きるのがムツかしいのは老年です。若い時や壮年時代は失敗しても社会が許してくれます。まだ役に立つからです。しかし役にたたなくなり、顔も体も醜くなっ

た老年には世間は許してくれません。その時、どう美しく生きるか、今から考えておきなさい」  
(引用終わり)

### 35 【蜀、呉と講和】十八史略

亮乃約官職、修法制、下教曰、夫参署者、集衆思、広忠益也。若遠小嫌、難相違覆、曠闕損矣。亮乃遣鄧芝、使呉修好。芝見呉王曰、蜀有重險之固。呉有参江之阻。共為唇齒、進可兼并天下、退可鼎足而立。呉遂絶魏專与漢和。

亮、乃ち官職を約し、法制を修め、教へを下して曰く「夫(そ)れ参署は、衆思を集め、忠益を広むるなり。若し小嫌(しょうけん)を遠ざけ、相違覆(いふく)することを難(はば)か(ら)ば、曠闕(こうけつ)して損あらん」と。亮、乃ち鄧芝(とうし)を遣はし、呉に使ひして好(よし)みを修めしむ。芝、呉王に見(まみ)えて曰く「蜀に重險(じゅうけん)の固(か)た(め)有り。呉に参江の阻(そ)有り。共に唇齒(しんし)と為らば、進みては天下を兼并(けんぺい)す可く、退きては鼎足(ていそく)して立つべし」と。呉、遂に魏と絶ち、専ら漢と和す。

### 36 【南船北馬】十八史略

魏主以舟師擊呉。呉列艦于江。江水盛長。魏主臨望、歎曰、我雖有武夫千群、無所施也。於是還師。

魏主、舟師(しゅうし)を以て呉を撃つ。呉、艦を江に列す。江水盛長す。魏主、臨み望みて歎じて曰く「我、武夫、千群有りと雖も、施す所無きなり」と。是(こゝ)に於いて師を還す。

### 37 【七縦七禽】十八史略

南夷畔漢。丞相亮往平之。有孟獲者。素為夷漢所服。亮生致獲、使觀營陣、縦使更戦。七縦七禽、猶遺獲。獲不去曰、公天威也。南人不復反矣。

南夷、漢に畔(そむ)く。丞相亮、往(ゆ)きて之を平らぐ。孟獲(もうかく)なる者有り。素より夷・漢の服する所と為る。亮、獲を生致(せいち)し、營陣を觀(み)しめ、縦(ゆる)して更に戦はしむ。七縦七禽(しちししようしちきん)、猶ほ獲を遣(や)る。獲、去らずして曰く「公は天威なり。南人復た反せず」と。

参考『三国志』蜀志・馬謖伝の注 「心を攻むるを上と為す」

用兵之道、攻心為上、攻城為下。心戦為上、兵戦為下。

【余談】饅頭の起源説話、カエサルの捕虜解放と「寛容」(クレメンティア)

### 38 【波濤、洶湧す】十八史略

魏主又以舟師臨呉。見波濤洶湧、歎曰、嗟乎、固天所以限南北也。

魏主、又、舟師を以て呉に臨む。波濤の洶湧(きょうよう)するを見て、歎じて曰く「嗟乎(ああ)、固(まこと)に天の南北に限る所以(ゆゑん)なり」と。

### 39 【曹丕、死す】十八史略

魏主丕殂。僭位七年。改元者一、曰黄初。諡曰文皇帝。子叡立。是為明帝。叡母被誅。丕嘗与叡出獵、見子母鹿。既射其母、使叡射其子。叡泣曰、陛下已殺其母。臣不忍殺其子。丕惻然。及是為嗣即位。

魏主・丕、殂(そ)す。僭位(せんい)すること七年。改元すること一、黄初と曰ふ。諡(おくりな)して文皇帝と曰ふ。子・叡(えい)立つ。是を明帝と為す。叡の母、誅せらる。丕、嘗て叡と出でて獵し、子母(しぼ)の鹿を見る。既に其の母を射(い)、叡をして其の子を射せしむ。叡、泣きて曰く「陛下、已に其の母を殺せり。臣、其の子を殺すに忍びず」と。丕、惻然(そくぜん)たり。是(こゝ)に及んで、嗣と為り、位に即く。

参考・魏王朝の皇帝 0 曹操(武帝) 1 曹丕(文帝) 2 曹叡(明帝) 3 曹芳(廢位。齊王) 4 曹髦(殺害。廢位。高貴郷公) 5 曹奂(元帝。曹操の孫。二十歳で司馬炎に禪讓)

### 40 【処士、管寧】十八史略

処士管寧、字幼安。自東漢末、避地遼東参十七年。魏徵之。乃浮海西歸。拜官不受。処士・管寧(かんねい)、字は幼安。東漢の末より、地を遼東に避(よ)くすること参十七年。魏、之を徵(め)す。乃ち海に浮かびて西に歸る。官に拜すれども受けず。

(頼山陽『詠三国人物十二絶句』より)

### 十二、管寧

瓜分 鼎峙 竟に如何 幾個英雄 未だ戈を息めず

瓜分 鼎峙 竟に如何 幾個英雄 未だ戈を息めず  
堅坐 膝 穿つも 還た自ら快とす  
領し来る一榻 我が山河なり

榻 〓 牀榻。寢台兼長椅子。

〔大意〕

管寧は高潔な学者だった。時の権力者から何度も出馬を要請されても、その度に丁重に辞退し、出仕しなかった。三国の争乱が果てしなく続いた乱世。天下を狙うガラガラした英雄たちの時代、権力と距離を置く管寧の生き方は、一服の清涼剤のようだ。

彼は何十年も、質素な自宅の長椅子を愛用し続けた。ひぎのところに穴があいても、使い続けた。彼は隠士としての質素な生活に満足した。彼にとって、自由な思索の時間をすごせる一畳ほどの長椅子は、天下と同等の価値のある世界なのだった。

〔評〕立って半畳寝て一畳、天下取つても二合半。起きて三尺寝て六尺、千石万石も米五合。

〔参考〕篠崎小竹は、頼山陽は管寧を非難せず仲間のような共感を寄せた、と評している。

#### 4 1 【出師の表】十八史略

漢丞相亮、率諸軍北伐魏。臨發上疏曰、今天下參分、益州疲弊。此危急存亡之秋也。宜開張聖聽、不宜塞忠諫之路。宮中・府中、俱為一体。陟罰臧否、不宜異同。若有作姦犯科及忠善者、宜付有司論其刑賞、以昭平明之治。親賢臣遠小人、此先漢所以興隆也。親小人遠賢臣、此後漢所以傾頹也。臣本布衣、躬耕南陽、苟全性命於乱世、不求聞達於諸侯。先帝不以臣卑鄙、猥自枉屈、參顧臣於草廬之中、諮臣以當世之事。由是感激、許先帝以駟馳。先帝知臣謹慎、臨崩、寄以大事。受命以來、夙夜憂懼、恐付託不效、以傷先帝之明。故五月渡瀘、深入不毛。今南方已定、兵甲已足。當獎率參軍、北定中原。興復漢室、還于旧都、此臣所以報先帝而忠陛下之職分也。遂屯漢中。

漢の丞相・亮、諸軍を率ゐて北のかた魏を伐つ。発するに臨み、上疏(じょうそ)して曰く「今、天下參分し、益州疲弊せり。此れ危急存亡の秋(とき)なり。宜しく聖聽を開帳すべく、宜しく忠諫(ちゅうかん)の路を塞ぐべからず。宮中・府中は俱(とも)に一体たり。臧否(ぞうひ)を陟罰(ちよくばつ)するに、宜しく異同あるべからず。若し、姦を作(な)し、科を犯し、及び忠善の者有らば、宜しく有司に付して其の刑賞を論じ、以て平明の治を昭(あきら)かにすべし。賢臣に親しみ小人を遠ざくるは、此れ先漢の興隆せし所以なり。小人に親しみ賢人を遠ざくるは、此れ後漢の傾頹(けいたい)せし所以なり。臣、本(もと)布衣(ほい)、南陽に躬耕(きゆうこう)し、性命を乱世に苟全(こうぜん)して、聞達(ぶんたつ)を諸侯に求めず。先帝、臣が卑鄙(ひひ)なるを以てせず、猥(みだ)りに自ら枉屈(おうくつ)して、臣を草廬(そうろ)の中に參顧し、臣に諮(と)ふに當世の事を以てす。是に由(よ)りて感激し、先帝に許すに駟馳(くち)を以てす。先帝、臣の謹慎なるを知り、崩ずるに臨み、寄するに大事を以てせり。命を受けてより以来、夙夜(しゆくや)憂懼(ゆうく)し、付託の效(こう)あらずして、以て先帝の明を傷(そこな)はんことを恐る。故に五月、瀘(ろ)を渡り、深く不毛に入る。今、南方、已に定まり、兵甲、已に足る。當(まさ)に參軍を獎率(しょうそつ)して、北のかた中原を定むべし。漢室を興復し、旧都を還(かへ)さんことは、此れ臣が先帝に報いて陛下に忠なる所以の職分なり」と。遂に漢中に屯す。

比較参考 宮沢賢治の詩(一〇八二・あすこの田はねえ)、「佐久間艇長の遺言」

参考 土井晚翠『天地有情』『星落秋風五丈原』

(前略) 夢寐(むび)に忘れぬ君王の／いまはの御こと畏みて／心を焦がし身をつくす／暴露のつとめ幾とせか／今落葉(らくよう)の雨の音／大樹ひとたび倒れなば／漢室の運はたいかに。／\*

\* \* /丞相病あつかりき。(後略)

#### 4 2 【北伐】十八史略

明年、率大軍攻祁山。戎陣整齊、号令明肅。始魏以昭烈既崩、數歲寂然無聞、略無所備。猝聞亮出、朝野恐懼。於是天水・安定等郡、皆亮、関中響震。魏主如長安、遣張郃拒之。亮使馬謖督諸軍戰于街亭。謖違亮節度。郃大破之。亮乃還漢中。已而復言於漢帝曰、漢賊

不両立、王業不偏安。臣鞠躬尽力、死而後已。至於成敗利鈍、非臣所能逆觀也。引兵出散關、困陳倉。不克。

明年、大軍を率いて、祁山(きざん)を攻む。戎陣(じゅうじん)整齐、号令、明肅(めいしゆく)なり。始め魏、昭烈、既に崩じ、數歳、寂然として聞くこと無きを以て、略(ぼ)備ふる所無し。猝(にはか)に亮の出づるを聞き、朝野、恐懼(きょうく)す。是(ここ)に於て天水・安定等の郡、皆、亮に応じ、関中、響震(きょうしん)す。魏主、長安に如(ゆ)き、張郃(ちようこう)をして之を拒(ふせ)がしむ。亮、馬謖(ばしよく)をして諸軍を督(とく)くし街亭に戦はしむ。謖、亮の節度に違(たが)ふ。郃、大いに之を破る。亮、乃ち関中に還る。已(すで)にして復(また)漢帝に言(まう)して曰く「漢と賊とは両立せず、王業は偏安(へんあん)せず。臣、鞠躬(きくきゆう)して力を尽し、死して後に已(や)まん。成敗利鈍(りどん)に至りては、臣が能く逆(あらかじ)め觀(み)る所に非ざるなり」と。兵を引ゐて散關より出で、陳倉を困(かこ)む。克たず。

#### 43 【孫權、皇帝を称す】十八史略

吳王孫權、自称皇帝於武昌、追尊父堅、為武烈皇帝、兄策為長沙桓王。已而遷都建業。

吳王・孫權、自ら皇帝を武昌に称し、父・堅を追尊して武烈皇帝と為し、兄・策を長沙桓王(ちようさかんおう)と為す。已(すで)にして都を建業に遷(うつ)す。

#### 44 【木牛流馬】十八史略

蜀漢丞相亮、又伐魏困祁山。魏遣司馬懿督諸軍拒亮。懿不肯戰。賈詡等曰、公畏蜀如虎。

奈天下笑何。懿乃使張郃向亮。亮逆戰。魏兵大敗。亮以糧尽退軍。郃追之、与亮戰、中伏弩而死。亮還勸農講武、作木牛流馬、治邸閣、息民休士、參年而後用之。悉衆十万、又由斜谷口伐魏、進軍渭南。魏大將軍司馬懿引兵拒守。

蜀漢の丞相・亮、又、魏を伐ち、祁山(きざん)を困む。魏、司馬懿(しばい)を遣はして諸軍を督して亮を拒(ふせ)がしむ。懿、肯て戦はず。賈詡(かく)ら曰く「公、蜀を畏るること虎の如し。天下の笑ひを奈何(いかん)せん」と。懿、乃ち張郃(ちようこう)をして亮に向かはしむ。亮、逆(むか)へ戦ふ。魏の兵、大敗す。亮、糧の尽くるを以て軍を退く。郃、之を追ひ、亮と戦ひ、伏弩(あ)たりて死す。亮、還りて農を勧め武を講じ、木牛流馬を作り、邸閣を治め、民を息(やす)め士を休め、參年にして後に之を用ふ。衆十万を悉(つく)くして、又、斜谷口(やくこくこう)より魏を伐ち、進みて渭南(いなん)に軍す。魏の大將軍・司馬懿、兵を引ゐて拒ぎ守る。

#### 45 【蜀の屯田兵】十八史略

亮以前者数出、皆運糧不繼、使己志不伸、乃分兵屯田。耕者雜於渭浜居民之間、而百姓安堵、軍無私焉。

亮、前者(さき)に數々(しばしば)出づるも、皆、運糧繼がず、己(おの)が志をして伸びざらしめしを以て、乃ち兵を分かちて屯田す。耕す者、渭浜(いひん)の居民の間に雜(ま

じり、而も百姓(ひやくせい)安堵し、軍に私(わたくし)無し。

#### 46 【女衣巾幗】十八史略

亮数挑懿戰。懿不出。乃遣以巾幗婦人之服。亮使者至懿軍。懿問其寢食及事煩簡、而不及戎事。使者曰、諸葛公夙興夜寐、罰二十以上皆親覽。所噉食、不至數升。懿告人曰、食少事煩、其能久乎。

亮、数々、懿に戦ひを挑む。懿、出でず。乃ち遣(おく)るに巾幗(きんかく)婦人の服を以てす。亮の使者、懿の軍に至る。懿、其の寢食及び事の煩簡を問ひて、戎事(じゅうじ)に及ばず。使者曰く「諸葛公、夙(つと)に興(お)き、夜に寝(い)ね、罰二十以上は皆、親(みずか)ら覽(み)る。噉食(たんしょく)する所は數升に至らず」と。懿、人に告げて曰く「食少なく事煩はし、其れ能(よ)く久しからんや」と。

#### 47 【死せる諸葛、生ける仲達を走らす】十八史略

亮病篤。有大星、赤而芒、墜亮營中。未幾亮卒。長史楊儀整軍還。百姓奔告懿。懿追之。姜維令儀反旗鳴鼓、若將向懿。懿不敢逼。百姓為之諺曰、死諸葛、走生仲達。懿笑曰、吾能料生、不能料死。亮嘗推演兵法、作八陣圖。至是懿案行其營壘、歎曰、天下奇才也。

亮、病ひ篤(あつ)し。大星有り、赤くして芒あり、亮の營中に墜つ。未だ幾(いくばく)ならずして亮、卒す。長史・楊儀、軍を整へて還る。百姓、奔(は)しりて懿に告ぐ。懿、之を追ふ。姜維(きょうい)、儀をして旗を反(かへ)し鼓を鳴らし、將(まさ)に懿に向かはんとするが若(ごと)くせしむ。懿、敢て逼(せま)らず。百姓、之が為に諺(ことわざ)して曰く「死せる諸葛、生ける仲達を走らす」と。懿、笑ひて曰く「吾、能(よ)く生を料(は)か(れ)ども、死を料(は)ること能はず」と。亮、嘗て兵法を推演し、八陣の圖を作る。是(こゝ)に至りて、懿、其の營壘を案行し、歎じて曰く「天下の奇才なり」と。

「孔明が死んで夜講の入りが落ち」柳多留64篇

吉川英治『三国志』篇外余録より引用

——公論ハ敵讐ヨリ出ヅルニ如カズ、と。  
——山陽はこういつている。

「彼はまさに天下の奇才だ」

と、激賞したと伝えられている、そのことばをさしていったのである。これ以上、孔明を論じ、孔明を是非々々非々してみる必要はないじゃないか——と世の理論好きに一句止(とど)めをさしたものだといえよう。

だが、ここでもう一言、私見をゆるしてもらえらるなら、私はやはりこう云いたい。仲達は天下の奇才だ、といったが、私は、偉大なる平凡人と称(たた)えたいのである。孔明ほど正直な人は少ない。律義実直である。決して、孔子孟子のような聖賢の円満人でもなければ、奇矯なる快男児でもない。ただその平凡が世に多い平凡とちがって非常に大きいのである。

彼が、軍を移駐して、ある地点からある地点へ移動すると、かならず兵舎の構築とともに、附近の空閑地に蕪(かぶ)・蔓菁(まんせい)ともよぶ)の種を蒔(ま)かせたということだ。この蕪は、春夏秋冬、いつでも成育するし、土壌(どじょう)をえらばない特質もある。そしてその根から茎(くき)や葉まで生(なま)でも煮ても喰べられるという利便があるので、兵の軍糧副食物としては絶好の物だったらしい。

こういう細かい点にも気をつくような人は、いわゆる豪快英偉な人物の頭脳では求められないところであろう。正直律義な人にして初めて思いついた所である。とかく青い物の栄養に欠けがちな陣中食に、この蕪(かぶ)はずいぶん大きな戦力となったにちがいない。戦陣を進める場合も、そのまま、捨てて行って惜し気もないし、また次の大地ですぐ採取することができる。で、この蔓菁(まんせい)の播植(はしょく)は、諸所の地方民の日常食にも分布されて、今も蜀の江陵地方の民衆のあいだでは、この蕪のことを「諸葛菜(しょかつさい)」とよんで愛食されているという。(引用終わり)

参考・頼山陽の漢詩「題司馬仲達觀武侯營址圖」

死諸葛 生仲達 吾能料生不料死 此語大痴乃小黠

却有天下奇才目 足見姦雄心真服

寿曰管蕭流 甫曰伊呂儔 後儒贊頌雷同耳 不若公論出敵讐

司馬仲達、武侯の營址を觀る圖に題す  
死せる諸葛、生ける仲達。「吾、能く生を料るも死を料らず」。此の語、大痴なれども乃ち小黠なり。却つて天下の奇才の目有り。姦雄の心、真に服するを見るに足る。寿は曰ふ、管蕭の流と。甫は曰ふ、伊呂の儔と。後儒の贊頌は雷同なるのみ。若かず、公論の敵讐より出づるに。

頼山陽、文政十二年(1829)の作

〔注〕

大痴乃小黠、「小黠大痴」(こざかしくふるまうが実はとても愚かである)の逆。

寿曰「正史」「三国志」の陳寿の評「可謂識治之良才、管蕭之亞匹矣」。

甫曰「杜甫の詩「詠懷古跡」に「伯仲之間見伊呂」(殷の伊尹、周の呂尚と伯仲している)

〔大意〕

司馬懿が諸葛孔明の陣營のあとを見る様子を描いた絵図に書きつけた漢詩。

死せる諸葛孔明、生ける司馬仲達を走らす。五丈原の最後の戦いの後、司馬懿こと司馬仲達は「私は、生きている者の考えはわかるが、死んだ者の考えはわからない」と、悔しまぎれの言い訳を述べた。この言葉は、愚かな中にも少し機知を感じる。また司馬懿は、撤退した蜀軍の陣營のあとを見て、孔明の才能に瞠目し「天下の奇才なり」と評した。奸智にたけた英雄である司馬懿が、本当に孔明に心服したことが、わかる。

後世の知識人の孔明評は、どれも陳腐だ。歴史家である陳寿は、孔明をいにしへの管仲や蕭何になぞらえて高く評価した。大詩人である杜甫は、孔明を伊尹や呂尚に匹敵すると賞賛した。これらはどれも、結局はステレオタイプの評価にすぎない。孔明を相手に戦った司馬懿による孔明評には、及ばない。

敵として戦ったライバルから出た評価が、いちばん公平だ。

「評」血戦の相手からの「逆感状」は、凡百の批評より重みがある。

48 【泣いて馬謖を斬る】十八史略

亮為政無私。馬謖素為亮所知。及敗軍流涕斬之、而卹其後。李平・廖立、皆為亮所廢。及聞亮之喪、皆歎息流涕、卒至發病死。史称、亮開誠心、布公道。刑政雖峻而無怨者。真識治之良材。而謂其材長於治國、將略非所長、則非也。初丞相亮、嘗表於帝曰、臣成都有桑八百株、薄田十五頃。子弟衣食自有余。不別治生以長尺寸。臣死之日、不使內有余帛、外有贏財、以負陛下。至是卒。如其言。諡忠武。

亮、政を為すに私(わたくし)無し。馬謖(ばしょく)素より亮の知る所と為る。軍を敗(やぶ)るに及び、涕(なみだ)を流して之を斬り、而(しか)して其の後を卹(あはれ)む。李平・廖立(りょうりつ)、皆、亮の廢する所と為る。亮の喪(そう)を聞くに及び、皆、歎息流涕(りゅうてい)し、卒(つひ)に病を發して死するに至る。史に称す「亮、誠心を開き、公道を布(し)く。刑政(けいせい)、峻(しゅん)なりと雖も而も怨む者無し。真に治(ち)を識るの良材なり」と。而して「其の材、國を治むるに長じて、將略は長ずる所に非ず」と謂ふは則ち非なり。初め丞相・亮、嘗て帝に表して曰く「臣、成都に桑八百株、薄田十五頃(けい)有り。子弟の衣食、自(おの)ずか(ら)余り有り。別に生を治めて以て尺寸(せきすん)を長ぜず。臣死するの日、内に余帛(よはく)有り、外に贏財(えいざい)有りて以て陛下に負(そむ)かしめず」と。是(こゝ)に至りて卒(しゅつ)す。其の言の如し。忠武と諡(おくりな)す。

49 【司馬懿と曹爽】十八史略

魏主性好土功、先是既治許昌宮。後又作洛陽宮、徙長安鐘簾・橐駝・銅人・承露盤於洛陽。盤折聲聞數十里。銅人重不可致。乃大發銅、鑄銅人二、列坐於司馬門外、号曰翁仲。起土山於芳林園、植雜木善草、捕禽獸致其中。諫者皆不納。魏主有疾。召司馬懿入朝、以曹爽為大將軍。魏主歿。僭位十四年。改元者參、曰太和・青龍・景初。子芳立。是為廢帝邵陵厲公。芳八歲即位。司馬懿・曹爽、受遺詔輔政。懿為太傅。

魏主、性、土功を好む。是より先、既に許昌宮を治む。後に又、洛陽宮を作り、長安の鐘簾(しょうきよ)・橐駝(たくだ)・銅人・承露盤を洛陽に徙(うつ)す。盤折れて声數十里に聞こゆ。銅人は重くして致すべからず。乃ち大いに銅を發し、銅人二を鑄(い)て、司馬門外に列坐せしめ、号して翁仲と曰ふ。土山を芳林園に起こし、雜木善草を植ゑ、禽獸を捕へて其の中に致す。諫(いさ)むる者、皆、納(い)れず。魏主、疾(やまひ)有り。司馬懿を召して入朝せしめ、曹爽を以て大將軍と為す。魏主・叡、歿(そ)す。僭位(せんい)すること十四年。改元すること參、太和・青龍・景初と曰ふ。子・芳立つ。是を廢帝邵陵(しょうりょう)の厲公(れいこう)と為す。芳、八歳にして即位す。司馬懿・曹爽、遺詔(いしやう)を受けて、政(まつりごと)を輔(たす)く。懿を太傅(たいふ)と為す。

50 【費禕と姜維】十八史略

漢自丞相亮既亡、蔣琬為政。楊敏毀琬曰、作事憤憤、不及前人。或請推治敏。琬曰、吾実不如前人、無可推。琬卒。費禕・董允、為政。公亮尽忠。允卒。姜維与、費禕並為政。漢は、丞相・亮の既に滅びしより、蔣琬(しょうえん)、政を為す。楊敏、琬を毀(そ)して曰く「事を作(な)すこと憤憤(かいかい)たり、前人に及ばず」と。或ひと、敏を推治(すいち)せんと請ふ。琬曰く「吾、実に前人に如かず、推すべき無し」と。琬、卒す。費禕(ひい)・董允(とういん)、政を為す。公亮(こうりょう)にして忠を尽くす。允、卒す。姜維(きょうい)、費禕と並び政を為す。

51 【夏侯霸、蜀に亡命】十八史略

魏曹爽驕奢無度。司馬懿殺之。懿為魏丞相、加九錫不受。爽之党夏侯霸奔蜀。姜維問之曰、懿得政。復有征伐志否。霸曰、彼宮立家門、未遑外事。有鍾士季者。雖少若管朝政、吳・蜀之憂也。

魏の曹爽(そうそう)、驕奢(きょうしゃ)にして度無し。司馬懿(しばい)、之を殺す。懿、魏の丞相と為り、九錫(きゅうしやく)を加ふれども受けず。爽の党の夏侯霸(かこうは)、蜀に奔(は)しる。姜維、之に問ひて曰く「懿、政を得たり。復た征伐の志有りや否や」と。霸曰く「彼、家門を宮立して、未だ外の事に違(いとま)あらず。鍾士季(しょうしき)といふ者有り。少(わか)しと雖も若(も)し朝政を管せば、吳・蜀の憂いならん」と。

5 2 【司馬懿の死】十八史略

魏司馬懿卒。以其子師為撫軍大將軍、録尚書事。  
魏の司馬懿卒す。其の子師を以て、撫軍大將軍と為し、尚書の事を録せしむ。

(頼山陽「詠三国人物十二絶句」より)

八、仲達

心甘蜀將遺巾幘 手辣魏軍歸戰幢 三馬同槽終幾日 回頭群鬣去過江  
心 甘んず 蜀將の巾幘を遺るを  
手 辣にして 魏軍 戦幢を歸す  
三馬同槽 終に幾日ぞ  
頭を回せば 群鬣 去りて江を過ぐ

鬣<sup>ハ</sup>馬のたてがみ。

三馬同槽<sup>ハ</sup>最晩年の曹操が見た暗示的な夢。

去過江<sup>ハ</sup>『晋書』「五馬浮渡江、一馬化為龍」。司馬氏の西晋の滅亡を指す。

〔大意〕

司馬仲達は、二重底、三重底の人物だった。蜀の諸葛孔明から女衣巾幘を贈られ挑発されても、冷静さを保ち、魏軍を無事に帰還させた。彼は辣腕の政治家でもあった。

魏の曹操は死ぬ直前、夢を見た。三頭の馬が、一つのかいばおけ(槽)に頭をつこみ、もぐもぐと餌をあさる。曹操は、自分が見た予知夢の意味を知らぬまま死んだ。その後、司馬仲達と二人の息子が、曹氏の魏王朝を乗っ取った。「槽」は「曹」の暗示だった。

司馬氏の天下も短かった。「五頭の馬が川を渡る。一頭だけが龍になる」という不吉な童謡が流行したあと、司馬仲達を初代皇帝とする西晋はあえなく滅亡した。童謡の予言どおり、長江をわたって逃げた王族の一人が、東晋を立てた。

〔評〕権力も、つかみどころのない夢や童謡も、はかなさという点では紙一重だ。

〔参考〕篠崎小竹は、東晋が地方政権に転落しつつも江南の地で存続できたのは「典午」(司馬氏のアナグラム)の連中にとっては過分の幸運だった、と評している。

5 3 【孫権の死】十八史略

吳主殂。諡曰太皇帝。子亮立。

吳主殂(そ)す。諡(おくりな)して太皇帝と曰ふ。子亮立つ。

5 4 【費禕の死】十八史略

漢費禕、汎愛不疑。降人刺殺之。姜維用事、数出兵攻魏。

漢の費禕、汎(ひろ)く愛して疑はず。降人、之を刺殺す。姜維、事を用い、数(しばしば)兵を出だして魏を攻む。

55 【司馬師の野望】十八史略

魏李豐、數為魏主所召。司馬師知其議已殺之。魏主不平。左右勸誅師。魏主不敢發。師廢魏主。僭位十六年。改元者二、曰正始・嘉平。師迎立高貴鄉公。是為廢帝。名髦。文帝之孫、明帝之姪。年十四即位。

魏の李豐、數々(しばしば)魏主の召す所と為る。司馬師、其の己を議することを知りて之を殺す。魏主、平らかならず。左右、師を誅せんことを勸む。魏主、敢えて發せず。師、魏主を廢す。僭位(せん)すること十六年。改元すること二、正始・嘉平と曰ふ。師、高貴郷公を迎立す。是を廢帝と為す。名は髦(ぼう)。文帝の孫にして、明帝の姪(てつ)なり。年十四にして即位す。

56 【司馬昭の専横】十八史略

揚州都督毋丘儉・刺史文欽、起兵討司馬師。師擊敗之。師卒。弟昭為大將軍、録尚書事。已而為大都督、假黃鉞。揚州都督諸葛誕、起兵討昭。昭攻殺之。昭為相國、封晉公。加九錫不受。

揚州都督・毋丘儉(かんきゅうけん)、刺史・文欽、兵を起こして司馬師を討つ。師、擊ちて之を敗る。師、卒す。弟の昭、大將軍と為り、録尚書事と為る。已(すで)にして大都督と為り、黃鉞(こうえつ)を假(か)る。揚州の都督・諸葛誕、兵を起こして昭を討つ。昭、之を攻め殺す。昭、相國(しょうこく)と為り、晉公に封ぜらる。九錫を加ふれども受けず。

57 【呉の内訌】十八史略

吳主亮親政。數出中書、視太帝時旧事。嘗食生梅索蜜。蜜中有鼠矢。召藏吏問曰、黃門從爾求蜜邪。吏曰、向求不敢与。黃門不服。令破鼠矢。矢中燥。因大笑曰、若矢先在蜜中、中外俱湿。今外湿内燥。必黃門所為也。詰之果服。左右驚慄。大將軍孫綝、以其多所難問称疾不朝。以兵圍宮、廢亮為会稽王、迎立瑯琊王休。休立。以綝為丞相。綝又無禮於新君。遂被誅。

吳主・亮、親政す。數々中書に出でて、太帝の時の旧事を視る。嘗て生梅を食らひて、蜜を求む。蜜中に鼠矢(そし)有り。藏吏(ぞうり)を召して問ひて曰く「黃門、爾(なんぢ)より蜜を求めしか」と。吏曰く「向(さき)に求めしも敢て与へざりき」と。黃門、服せず。鼠矢を破らしむ。矢中(しちゅう)、燥(かは)く。因(よ)りて大笑して曰く「若(も)し矢、先より蜜中に在らば、中外俱(とも)に湿(うる)るほはん。今、外湿(うる)ひ内燥(かは)く。必ずや黃門の為す所ならん」と。之を詰(な)じれば果たして服せり。左右、驚き慄(おの)のく。大將軍孫綝(そんちん)、其の難問する所多きを以て、疾(やまひ)と称して朝せず。兵を以て宮を圍(かこ)み、亮を廢して会稽王と為し、瑯琊王(ろうやおう)・休を迎え立つ。休立つ。綝を以て丞相と為す。綝、又、新君に礼無し。遂に誅せらる。

58 【魏帝殺害】十八史略

魏主髦見威權日去、不勝其忿。曰、司馬昭之心、路人所知也。率殿中宿衛蒼頭・官僮、鼓譟出、欲誅昭。昭之党賈充、入与魏主戰、成濟抽戈刺魏主髦。殞于車下。追廢為庶人。僭位七年。改元者二、曰正元・甘露。司馬昭迎立常道郷公璜。是為魏元皇帝。常道郷公元皇帝、初名璜、燕王宇之子、操之孫也。年十五即位。改名奐。

魏主・髦(ぼう)、威權、日に去るを見て、其の忿(いかり)に勝(た)へず。曰く「司馬昭の心は路人も知る所なり」と。殿中の宿衛・蒼頭(そうとう)・官僮(かんどう)を率(も)て、鼓譟(こそう)して出で、昭を誅せんと欲す。昭の党賈充(かじゅう)、入りて魏主と戦ひ、成濟、戈を抽(ぬ)きて魏主・髦を刺す。車下に殞(お)つ。追廢(ついはい)して庶人(しよじん)と為す。僭位(せんい)すること七年。改元すること二、正元・甘露と曰ふ。司馬昭、常道郷公・璜(こう)を迎へ立つ。是を魏の元皇帝と為す。常道公元皇帝、初めの名は璜、燕王宇の子、操の孫なり。年十五にして即位す。名を奐(かん)と改む。

59 【諸葛瞻、戦死】十八史略

漢姜維屢伐魏。司馬昭患之、遣鄧艾・鍾会、將兵入寇。会從斜谷・駱谷・子午谷、趨漢中、艾自狄道、趨甘松・沓中、以綴姜維。維聞会聞已入漢中、引兵從沓中還。艾追躡之大戰。維敗走、還守劍閣、以拒会。艾進至陰陰平、行無人之地七百里鑿山通道、造作橋閣。山高谷深。艾以氈自裹、推転而下。將士皆攀木緣崖、魚貫而進。至江油。以書誘漢將諸葛瞻。瞻斬其使。列陣綿竹以待。敗績。漢將軍諸葛瞻死之。瞻子尚曰、父子荷国重恩。不早斬黃皓、使敗国殄民。用生何為。策馬冒陳而死。

漢の姜維(きやうい)、屢(しばしば)魏を伐つ。司馬昭、之を患(うれ)ふ。鄧艾(とうがい)・鍾会をして、兵を將(ひき)ゐて入寇(にゆうこう)せしむ。会は斜谷(やくく)・駱谷(らくこく)・子午谷(しごんこく)より漢中に趨(おもむ)き、艾は狄道(てきどう)より甘松・沓中(とうちゆう)に趨き、以て姜維を綴(てい)す。維、会の已に漢中に入るを聞き、兵を引(も)て沓中より還る。艾、之を追躡(ついしよう)して大いに戦ふ。維、敗走し、還りて劍閣を守り、以て会を拒(ふせ)ぐ。艾、進みて陰平に至り、無人の地を行くこと七百里、山を鑿(うが)ちて道を通じ、橋閣を造作す。山高く谷深し。艾、氈(せん)を以て自ら裹(つつ)み、推転して下る。將士、皆木に攀(よ)ち崖に緣(より)、魚貫(ぎよかん)して進む。江油に至る。書を以て漢の將・諸葛瞻(しよかつせん)を誘ふ。瞻、其の使ひを斬り、陣を綿竹に列して以て待つ。敗績す。漢の將・諸葛瞻、之に死す。瞻の子・尚曰く「父子、国の重恩を荷ふ。早くに黄皓を斬らず、国を敗(やぶ)り民を殄(てん)せしむ。用(も)つて生くるも何をか為(な)さん」と。馬に策(むちう)ち陳(じん)を冒して死す。

60 【蜀漢滅亡】十八史略

漢人不意魏兵卒至、不為城守。乃遣使奉璽綬、詣艾降。皇子北地王諶怒曰、若理窮力屈、禍敗將及、便当父子君臣、背城一戰、同死社稷、以見先帝可也。奈何降乎。帝不聽。諶哭於昭烈之廟、先殺妻子而後自殺。艾至成都。帝出降。魏封為安樂公。帝在位四十一年、改元者四、曰建興・延熙・景耀・炎興。右自高帝元年乙未、至後帝禪炎興癸未、凡二十六帝、

通四百六十九年而漢亡。

漢人、魏兵の卒(にはか)に至るを意(おも)はず、城守(じょうしゆ)を為さず。乃ち使ひを遣はして璽綬(じじゆ)を奉ぜしめ、艾(がい)に詣(いた)りて降る。皇子(こうし)・北地王・謙(しん)、怒りて曰く「若し、理窮まり力屈し、禍敗(かはい)將(まさ)に及ばんとせば、便(すなわ)ち当(まさ)に父子君臣、城を背にして一戦し同じく社稷に死し、以て先帝に見(まみ)えば可なるべし。奈何(いかん)ぞ降らん」と。帝、聴かず。謙、昭烈の廟に哭し、先づ妻子を殺して後に自殺す。艾、成都に至る。帝、出でて降る。魏、封じて安樂公と為す。帝、在位すること四十一年、改元すること四、建興・延熙(えんき)・景耀(けいよう)・炎興と曰ふ。右、高帝の元年乙未(いつび)より、後帝・禪の炎興癸未(きび)に至るまで、凡(すべ)て二十六帝、通じて四百六十九年にして漢亡びたり。

## 6 1 【孫皓】十八史略

吳主休祖。諡曰景皇帝。兄子烏程侯皓立。

吳主・休、祖(そ)す。諡(おくりな)して景皇帝と曰ふ。兄の子・烏程侯(うていこう)皓(こう)立つ。

参考・吳王朝の皇帝 1 孫權(大帝) 2 孫亮(會稽王・廢帝) 3 孫休(景帝) 4 孫皓(末帝・歸命侯・孫權の孫)

## 6 2 【西晋、成立】十八史略

魏司馬昭、先是已受九錫。已而進爵為晋王。昭卒、子炎嗣。魏主奐僭位六年、改元二、曰景元・咸熙。炎迫魏主禪位、封為陳留王。後卒。晋人諡之曰元。魏自曹丕至是凡五世、四十六年而亡。自漢亡後、又歷甲申、闕正統一年。

魏の司馬昭、是より先、已に九錫を受く。已にして爵を進めて晋王と為る。昭卒し、子の炎、嗣(つ)ぐ。魏主奐、僭位すること六年、改元すること二、景元・咸熙(かんき)と曰ふ。炎、魏主に迫りて位を禪(ゆず)らしめ、封じて陳留王と為す。後、卒す。晋人、之に諡して元と曰ふ。魏、曹丕よりは是(ここ)に至るまで凡て五世、四十六年にして亡ぶ。漢亡びてより後、又、甲申(こうしん)を歴(へ)て、正統を闕(か)くこと一年なり。

平成二十五年十二月一日 第一稿

十二月五日 小修正

平成二十六年一月二十三日 川柳追加

二月十日 吉川英治『三國志』引用追加

三月十七日 引用追加

三月二十四日 追加